

[書 評]

## 『コンタクト・ゾーンの人文学 第I巻 —— Problematique/問題系』

[田中雅一 船山徹 編, 晃洋書房, 2011年]

深 海 菊 絵

(一橋大学大学院社会研究科)

わたしたち人間をとりまく世界は絶え間なく変化する。それゆえ、人間世界の解説を主眼とする人文学もまた、変化という宿命を逃れることはできない。本書は、人文学の行き詰まりを真摯に受け止め、「コンタクト・ゾーン(接触領域)」という概念を導きの糸として、新たなかたちの人文学を構想する挑戦的な書である。

本書でキーワードとなるコンタクト・ゾーンとは、「異なる文化領域を有する人びとの接触が生じる領域 [ii]」である。編者の一人である田中は、本書の出発点を二点あげている。第一に、グローバル化する現代社会への対応。第二に、「人間社会や文化、そして人間性と呼ばれてきた人間の理念でさえ本来異質な他者との交流を通じて生まれたのではないのか [iii]」という問い、である。本書の課題は、「異なる複数の文化の会おう場に注目しつつ、各文化の均質性自体を問うこと [iii]」である。

『コンタクト・ゾーンの人文学』は全4巻のシリーズであり、2006年から4年にわたる共同研究会での報告と『コンタクト・ゾーン』誌に掲載された論文をまとめたものである。第1巻にあたる本書には、コンタクト・ゾーンをめぐる理論的な11の論考が収録さ

れている。構成は、以下の通りである。

### 第I部 視点

第一章 コンタクト・ゾーンの人文学へ  
(田中雅一)

第二章 コンタクト・ゾーンとしての文化人類学的フィールド——占領下の日本で実施された米国人類学者の研究を中心に(谷口陽子)

第三章 文化接触としての仏典漢訳——「格義」と「聖」の序論的考察(船山徹)

### 第II部 フィールドへ・フィールドから

第四章 コンタクト・ゾーンとしてのライフ・ストーリー調査——第二言語での聞き取りにまつわる方法論的考察(酒井朋子)

第五章 イギリスでコンタクト・ゾーンを考える——グラストンベリーにおける文化人類学的調査を事例として(河西瑛里子)

第六章 接触領域における調査者のポジショナリティ——獅子舞集団との映像制作のプロセスを通じて

### 第III部 他者/性に交わる

第七章 音楽をつくる——現代的チベッ

- ト音楽の制作現場 (山本達也)
- 第八章 コンタクト・ゾーンとしての占領期ニッポン——「基地の女たち」をめぐって (田中雅一)
- 第九章 コンタクト・ゾーンに生きる女たち——在韓米相手のフィリピン女性「エンターテイナー」の場合 (徐玉子)
- 第十章 越境に生きる日本人女性たち——米軍基地をめぐるつきあい関係 (宮西香穂里)
- 第十一章 「他者」とともにある日常——インドにおけるコンタクト・ゾーンとしての国際結婚 (松尾瑞穂)

\*

「コンタクト・ゾーン」という言葉に聞き慣れない者が最初に問うのは、おそらく次のようなことだろう。コンタクト・ゾーンとはなにか、なぜその視点は人類学や人文学に必要なのか。これらの問いに対する答えは、田中論文(第一章)において明確に示されている。コンタクト・ゾーンという概念は、メアリー・L・プラットが『帝国のまなざし——旅行記とトランスカルチュレイション(1992)』のなかで提唱したものである。田中は、プラットの議論を追うことから、コンタクト・ゾーン概念の相互交渉的な特徴を考察し、現代社会を解釈する上で応用可能である点を指摘する。つづいて田中は、フィールドワークとの関連でコンタクト・ゾーンを検討し、二つの視点を提案する。第一に、フィールドとは、人類学者が当事者となって他者と出会うコンタクト・ゾーンであるという視点。第二に、フィールドを、すでに西欧の影響を多大に受けたコンタクト・ゾーンとして捉える視点、である。田中は、これらの視点が過去の人類学的営みを再考する端緒になり得ると主張する。最後に人文学との関連でコンタクト・ゾーンを検討し、1) 文化交流や交渉

に作用する権力作用を検討する可能性、2) 混雑性の強調、3) 人文学の周縁的な領域への配慮と対象の拡大、の三点を意義として提示する。

では、人類学のフィールドをコンタクト・ゾーンとして捉えることによって、如何なることが明らかになるのだろうか。谷口論文(第二章)は、「フィールド＝コンタクト・ゾーン」という視点から、1950年代初頭の日本で実施された米国人文化人類学者のフィールドワークと民族誌を分析する。谷口は、当時の人類学者と交流のあった人びとへの聞き取りとフィールドノートから、米国人類学者と村びととの間に相互交渉が成立していたことを確信する。しかし、それら相互交渉は、完成された民族誌に描かれていない。その違和感から、フィールドにおけるコンタクトが描かれた民族誌と描かれていない民族誌の比較検討を行い、民族誌の記述が各時代の主流理論、調査地と人類学者が所属する社会との間の社会政治的関係、に影響を受ける点を指摘する。そして、コンタクト・ゾーンが書き込まれたフィールドノートの可能性に言及している。

コンタクト・ゾーンという視点は、時空を越えて対象を捉え直すことを可能にする。編者の一人でもある船山(第三章)は、紀元後数世紀頃の中国における仏教の翻訳を主題としている。宗教文献の翻訳は、単にインド語から中国語へという一方向的な営みではなく、複数文化(インド文化と中国文化)の質的な相違、言語的相違、宗教的概念の相違という諸問題が絡む。そこで船山は、仏典漢訳をインド文化と中国文化の接触として捉え、漢訳の特徴を検討する。船山は、「格義」という仏教語に着目し、格義が本来の意味を意図的に拡大解釈する点を指摘する。漢語訳は、この格義(的)性格を免れず、インドの意味と中国の意味のはざまに、「ゆらぎ」を生じさせる。船山は、宗教語の翻訳はすべて格義(的)であり、翻訳というコンタクト・ゾーンにお

いて必然的に生じる現象だという。

酒井論文(第四章)は、フィールドにおける言語の問題に焦点を当てている。酒井は、アイルランドで行った自身の調査経験をもとに、第二言語で行うライフ・ヒストリー調査が必然的に抱え込む「不自由さ」を検討したうえで、非欧米国出身の調査者が欧米国で聞き取り調査を行う場における力関係と調査者の個人的・社会的背景が研究データの分析におよぼす影響を考察する。語り手の曖昧な言い回しやニュアンスを第二言語で汲みとることは容易ではない。だが、言語の「つたなさ」が「他者」としての役割を顕在化させることにより、研究者が権威をのがれ、調査協力者が自由に語る空間を作る可能性がある、という。酒井は、流暢にコミュニケーションをとる二者間のあいだの力関係を絶対視するのではなく、分析的に眺める視点の重要性を指摘する。

同じく欧米におけるコンタクト・ゾーンを取り上げる河西論文(第五章)は、グランベリーというイギリスの田舎町で実施したフィールドワークにおける自身と調査対象者の関係を考察する。フィールドで三つの異なる宗教的運動(グラストンベリー女神運動、ドルイド教、マイトレヤ・モナステリー)の儀礼や瞑想会に参加観察した河西は、調査対象とラポールを築けた事例と失敗に終わった事例をあげている。しかし、いずれの事例も、河西が調査者という立場を否定されていたという点で共通していると言う。こうした自身の立場と欧米を調査する欧米人類学者の立場を比較し、日本人である河西がイギリスでフィールドワークを行うという実践そのものが、従来のコンタクト・ゾーンの権力関係を錯乱させうる、と主張する。

岩谷論文(第六章)は、フィールドの人々と共同で行った映像制作のプロセスを考察の対象とし、人類学者のポジショナリティと民族誌記述の問題をとりあげる。兵庫県で祭礼に関するプロジェクトに参加していた岩谷は、

伝統的祭礼に関するデータを、デジタル機器を活用しながら映像という形で集積する、という役割を期待される。しかし、プロジェクトの進行とともに、岩谷の立場は、消滅しつつある文化を「デジタルビデオカメラで撮影する人」、すなわち、サルベージ(救出)する者から、共同制作者へと変化した。共同制作という相互交渉の場において、調査者も現地の人びとも同じ空間のなかに参与する同じ主体である。岩谷は、自身のポジショナリティの検討を通し、フィールドの人々を単純に研究対象として規定することや、彼らの「文化」を固定した実体として描き出すことの問題を指摘する。

山本論文(第七章)は、チベット難民のバンド、「アカマ」のCDアルバム制作過程を描いている。山本は人類学者であるとともに、このCDアルバムの制作者、演奏者としてレコーディングに参加している。レコーディングはチベット人、インド人、日本人が関与し、異種混交的な環境のなかでチベット音楽の創出が目指された。なにがチベット文化か、をめぐる参加者の概念の相違による衝突や、機材と人との関係など、さまざまなアクターが交渉しながら一つの作品を作り上げていく過程が丁寧に追われる。山本の記述からは、コンタクト・ゾーンにおいて、モノと人の関係に着目する重要性が示される。また、レコーディングにおいては、チベット文化やインド文化などの「分類そのものが接触と交渉において反復され、以前とは異なる形で生成した[p.179]」、と述べ、チベット文化を創出する実践のパフォーマティブな側面にも目を向けている。

田中論文(第八章)は、占領期の日本をコンタクト・ゾーンとしてとらえ、米兵相手の売春婦(パンパン)をめぐる言説を考察する。当時の雑誌やルポルタージュから、パンパンたちが、結婚制度から、そして「日本人」から逸脱する周縁的存在であったことが浮き彫りになる。他方、パンパンの手記には、売春

をするのは単に経済的な理由からだけではなく、パンパンの生活にある種の「魅力」を感じていた、という記述も見られる。言説の検討を通して田中が明らかにしたことは、米兵、日本人男性、日本人女性、子供たち、パンパンたち、が複雑なかたちでテキストを創出し、矛盾をかかえた声を発しているという状況である。それは、「コンタクト・ゾーンにおいてはすべての存在が中間者となる、なり得る [p. 188]」ことを示唆している。田中は、コンタクト・ゾーンの議論において「中間者」の視点を導入する必要性を主張する。

徐論文（第九章）は、韓国の米軍基地村で「性労働」に従事するフィリピン人女性に注目し、米兵と韓国人オーナー、フィリピン人女性がそれぞれの思惑を持って、接触する様相を描き出す。基地村のフィリピン人女性は、売春婦の烙印を避けるため、自らを「エンターテイナー」として位置づけている。彼女たちは、複雑な権力構造のなかでエンターテイナーとしてのアイデンティティを維持するために、恋愛言説を利用するなどの戦略をとる。徐は、フィリピン人女性のエージェンシーへの着目、また女性のからだ自体をコンタクト・ゾーンと捉えることにより、不均衡な力関係がミクロのレベルでは、よりダイナミックな関係性をもつことを主張する。最後に、彼女たちが自ら築いてきたエンターテイナーとしてのアイデンティティを、「茶化す」笑いに着目し、その意味を探っている。

宮西論文（十章）は、横須賀米軍基地で軍人妻として生きる女性たちの語りに注目することにより、「越境」に生きることを意味を考察する。米軍兵士と結婚した日本人女性は、いかに軍人妻としての立場を考えているのだろうか。なりそめに関する語りからは、軍人と交際する女性や米軍兵士に対するステレオタイプとは異なるストーリーが明らかになると同時に、偏見や家族との衝突など女性たちが直面する諸問題も露になる。また、宮西がインタビューの最後に妻たちに一般の人に向

けたメッセージをお願いすると、多くの者が「米軍や軍人妻としてではなく、ひとりの人間として自分たちを見て欲しい」という共通のメッセージを發したという。宮西はこれらを妻たちの意志の表れとし、越境に生きることは、カテゴリーで人を見るのではなく、その人自身に迫るつきあいを実践することだと結論する。

松尾論文（第十一章）は、インドに居住する「インニチ夫婦」（インド人男性と日本人女性の国際結婚）を事例とて、コンタクト・ゾーンとしての国際結婚を照射する。インドは、依然として外国人/非ヒンドゥーとの婚姻に関して強い反発が示されることが多い。そのなかで国際結婚をすることは、宗教的な事柄をはじめとした様々な差異やズレが顕在化する。では、こうした差異は、日常生活のなかでいかに調整されていくのだろうか。「インニチ夫婦」の当事者でもある松尾は、自身の経験を例にあげる。たとえば、義父にヒンドゥー女性の象徴であるティクリーをつけることを勧められ、親族の集いにつけて行く。こうした相互的な応答は、単にヒンドゥーへの同化というよりむしろ、ヒンドゥーである彼らと非ヒンドゥーである松尾が類似性によって断片的につながろうとする、共同性構築の試みであるという。コンタクト・ゾーンでは、衝突や反発が誘発されるだけでなく、差異を介した共同体が現れる。松尾論文はコンタクト・ゾーンの一つのあり方をわたしたちに示してみせる。

\*

本書に収められた 11 の論考は、コンタクト・ゾーンの視点から対象を見つめ直すことによって、従来の議論の問題点を明らかにし、新たな視点や課題を提出している。コンタクト・ゾーンとは、批判と創造の往復運動を助ける視点といえるだろう。この視点の特徴は、本書の論集としての魅力にも通じている。た

たとえば、宮西論文では、米軍兵と結婚した日本人女性が直面する家族との問題を取りあげるなかで、結婚を反対していた両親が、娘に子供が生まれるなり態度を一変させることもあることを付け加えている。この点について、田中論文が示した「中間者の視点」から考察を深めていく可能性をもっている。

このように、本論集の最大の魅力は相補完的であることであり、コンタクト・ゾーンの視点が有する批判力と創造力を論集のなかで証明している点である。これは、「コンタクト・ゾーン人文学」の可能性とも言えるだろう。

次に、人類学の領域でセクシュアリティ研究に携わる者として、少々気になった点を記したい。第一に、第Ⅱ部から第Ⅲ部を眺めたときの違和感である。換言するなら、フィールドワークと民族誌記述の関係の問題である。田中が記しているように、第Ⅲ部で提示された関係構築のあり方は、第Ⅱ部で焦点となっている調査者と被調査者の関係に共通しており、本書全体を通して、従来の人類学の問題に挑む構成をとっている。しかし、谷口や岩谷が論じたような民族誌の記述やポジショナリティに関する観点から、第Ⅲ部に収められたいくつかの論考を読むと、疑問は残る。当然のことながら、全ての視点を満足させるような論考など存在し得ない。だが、とりわけ、性や偏見に関連する事柄について聞き取り調査を行い、その成果を論考としてまとめあげる際には、対象と調査者の関係や聞き取り調査の状況などを考慮した記述方法を模索すべ

きであろう。

第二に、第Ⅲ部の意義がやや消極的に提示されている点である。第Ⅲ部に収められた論考は、これまで人類学が見過ぎてきた自他関係に言及しており、本書において極めて重要な役割を果たしている。だが、コンタクト・ゾーンという視点から性をめぐる現象を考察することは、これまで看過されてきた性的な領域における他者との関係性に光を当てること以上の意義があるのではないだろうか。それは、徐が論考のおわりで触れている「既存の力関係を無化し、新たな次元へと関係を開いていく可能性 [p. 232]」である。一晩の肉体的快楽を求めてクラブを訪れた米兵と、感情労働を行うフィリピン人女性が恋に落ちるといふ出来事により、もともとの思惑や権力関係が全く異なったものへと替わってしまう可能性。このようなコンタクト・ゾーンの可能性は、性を介した他者との関係に顕著な特徴である。性に関わる現象を取り上げながらも、本書においてこの点が強調されていないのは残念なことである。

評者はアメリカでセクシュアリティに関するフィールド調査を行なっているさなかに本書と出会った。難航するフィールドワークに頭を抱えていた評者に、本書は多大な気づきと希望を与えてくれた。「コンタクト・ゾーンの人文学」はオート・ポイエーシス的な知の体系である。この知的運動に共鳴しつつ、今後の発展に期待したい。